現代中国学部の歩み

【構想から創設まで】

*1992*年［平成４］

6．　学部長会議「21世紀を展望する愛知大学基本計画(案)」を評議会に提案。その「学部学科構想」では、名古屋校舎に「国際化・情報化をその内容に含む」新学部が構想される。

*1994*年［平成６］

5．　基本計画の見直しのなかで、学部長会議が名古屋校舎に「中国総合学部」の新学部設置を検討する提案。

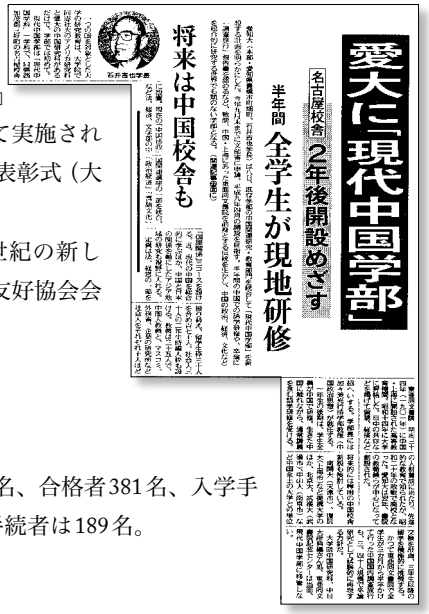
10．　評議会で「現代中国学部」への名称変更を承認。

*1995*年［平成７］

2．　現代中国学部設置委員会発足（委員長は加々美光行法学部教授）。

9．　文部省に現代中国学部の設置認可を申請。

中日新聞 *1995.5.9*


愛大に「現代中国学部」

名古屋校舎 2年後開設めざす

半年間 全学生が現地研修

将来は中国校舎も

*1996*年［平成８］

4．　愛知大学50周年記念講演会で『ワイルド・スワン』の著者ユン・チアン（張戎）女史が講演。あわせて実施された同書の読書感想文コンクール（応募者271名）の表彰式（大原信子さんが最優秀賞）挙行。

6．　愛知大学創立50周年記念国際シンポジウム「21世紀の新しい日中関係」を名古屋国際センターで開催。日中友好協会会長孫平化氏が特別講演。

12．　大学設置審議会、現代中国学部の設置を認可。

*1997*年［平成９］

2．　名古屋校舎に東教室棟（現代中国学部棟）完成。

2．　現代中国学部入学試験実施。一般選抜志願者1763名、合格者381名、入学手続者159名、これに推薦・留学生を加えると入学手続者は189名。

3．　『中国21』創刊準備号刊行（発行部数2000部）。

【創設期】

*1997*年度［平成９］

4．1　現代中国学部発足。第１期入学生186名。教員総数28名、うち他学部からの移籍８名、新規採用20名。

9．5　南開大学における第１回中国現地プログラム参加のため、学生164名、名古屋空港を出発（12月23日帰国）。

9．15　南開大学で第１回中国現地プログラム開学式と南開愛大会館起工式が挙行される。

9．　『中国21』創刊号（特集「21世紀の中国」）刊行（発行部数3000部）。

11．30　加々美学部長、北京・天津間の高速道路上で交通事故に遭う。

12．21　朝日新聞、「愛知大『現中』の挑戦」と題して現地プログラムを紹介する６回の連載を掲載開始。

2．　２回目の入学試験実施。一般選抜志願者932名。

朝日新聞 *1997.9.13*

中国・天津に愛大会館建設

友好・交流の拠点に

来年8月 南開大に留学生会館

南開愛大会館の完成予想図（愛知大学提供）

1998 年度［平成10］

4．1　古森利貞教授、張琢教授、馮天瑜教授着任。

4．　『中国21』別冊として「中国・南開大学現地プログラム特集」号を刊行。

8．28　第２回中国現地プログラム参加のため178名の学生が名古屋空港を出発。「南開愛大会館」の落成式を挙行（12月21日帰国予定のところ濃霧のため12月23日帰国）。

9．1　王家福教授着任。

3．31　王家福教授退職。

1999 年度［平成11］

4．1　加々美学部長再任。郭翔教授、皮細庚教授着任。

7．　台湾師範大学と学術・教育交流に関する協定を締結。

7．　現代中国学部の二胡サークル「知音」が東別院ホールで最初の演奏会を開催。

8．6～27　第１回中国現地研究調査を北京で実施。参加学生36名。

8．27　第３回中国現地プログラム参加のため、198名の学生が名古屋空港を出発（12月20日帰国）。

中日新聞 *1999.7.27*

愛知大の現代中国学部

中国でフィールド調査

結果 現地の学生シンポで発表

6．　第１回中国現地研究調査報告書『学生が見た北京社会』を出版（発行：愛知大学、定価2000円）。

7．　加々美光行学部長の辞任にともない、今泉潤太郎教授が学部長に就任（任期は01年３月まで）。

8．7～27　第２回中国現地研究調査を上海で実施。参加学生40名。

8．23　第４回中国現地プログラム参加のため、204名の学生が名古屋空港を出発（12月18日帰国）。

12．13　南開大学で現地プログラムに参加中の学生４名が、大学構内の凍結した池の上で遊んでいる最中、氷が割れて水中に転落、３名は中国人教員・学生らにより救助されたが、１名が死亡。

3．　現代中国学部第１回卒業生135名。

3．　皮細庚教授、丸山伸郎教授、馮天瑜教授、渡辺浩平講師退職。

朝日新聞 *1997.12.21*

週３回の太極拳の授業は３班に分かれる。空っぽのプールで受講する愛大生たち

南開大 異例の受け入れ

愛知大「現中」の挑戦 ①

天津プログラム

兄弟姉妹の仲

次世代の関係見すえ 食堂も「日本的」笑顔

百六十四人の若者が九月初め、中国・天津市にある南開大学を訪れ、いま、四カ月近い留学生活を終えようとしている。今春、愛知大学（本部・豊橋市）の名古屋校舎（西加茂郡三好町）に開設された現代中国学部（現中）の一期生。

南開大には四十カ国の六百五十人が留学中。だが、同じ大学から、一度にこれほどまとまった人数を迎えたのは、初めてのことだ。

南開大学を訪れ、いま、学生たちは「愛知モデル」と呼ばれる教授法、「家庭教師」などで飛躍的に語学力を伸ばし、ある意味で中国の社会を肌でつかもうとしている。

■

鈍い日差しの中、白い像が浮かび上がっていた。十二月初め、南開大の本部棟前の広場。

一九四九年の中華人民共和国（中国）成立以来、二十一世紀の中日関係を担う人材養成という重い荷を背負っている。今回のプロジェクトは、「兄弟姉妹の仲」を強め、中日関係を一層緊密にするためだ」

愛知大は上海にあった東亜同文書院の教職員らが、戦後、創立した。中国との関係が深く、八〇年十月、日本の大学としては初めて、南開大と交流協定を結んだ。

現代中国学部は日中国交正常化二十五周年の今年、十六年間にわたって国務院総理（首相）を務めた周恩来の全身像。氏は、南開大の一期生である。来年は生誕百年。日本にも留学したかつての指導者は、愛大生たちにも穏やかな顔を向けていた。

開学以来の留学生大量受け入れについて、南開大の王安俊副学長は、愛知大が古くから中国の大学と交流、合作（協力）を続けて来たことを指摘した。「私たちは二十一世紀の中日関係「真に中国を理解する研究機関と、日中友好の懸け橋となる人材の養成」（石井吉也学長）を目指して開設した。

南開大側は、国際学術交流処の張邁曾処長が陣頭指揮をした。「大学の重点項目」に位置付け、総務、建設、交流処、漢語言文化学院などが一丸となって、愛大生受け入れに取り組んだ。

優秀な教員を配し、課外活動や生活面でも心を砕いた。二階建ての講義棟である漢語言文化学院の一階は愛大生の専用とした。今年完成したばかりの宿舎、四号棟も愛大生優先になった。

食堂の職員全員に、教育もした。①メニューを改善②値段を安く③笑顔で接する④衛生的に、など。脂っこい中国料理に慣れない学生たちのために、おかゆや「病好飯」（脂抜きラーメン）を用意し、ポテトサラダやキュウリのあえものまで登場した。

愛知大の松岡正子助教授は「中国の公的機関では、笑顔のサービスは珍しい」と驚いた。

十月一日は中国の建国記念日の「国慶節」だった。この日から五日間、政府機関や企業は休みになる。だが、三十人の教員たちは、国慶節当日以外は、愛大生のために授業をした。

■

愛知大現代中国学部の現地プログラムは、愛知大にとっても南開大にとっても、新風を吹き込む息吹きとなった。

文・由本　昌敏
写真・西田　裕樹

（適宜は愛知大現代中国学部の松尾晃さん）

文化講座で学ぶ京劇。先生の横で歌の練習をする愛大生＝写真はいずれも南開大学で

【完成年度以後】……

2001 年度［平成13］

4．　今泉潤太郎学部長再任。服部健治教授着任。

5．26　東亜同文書院創立百周年記念行事の一環として、現代中国学部の現地研究調査の報告会を名古屋校舎で開催。

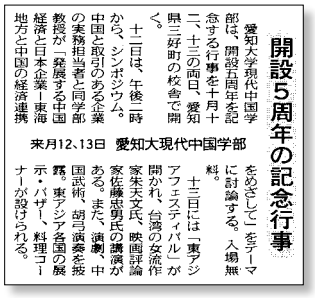
5．　中国人学生による初めての日本社会調査実施、5月31日第1回中国人学生による日本社会調査報告会開催（23日来日、6月1日帰国）。

8．8～30　第3回中国現地研究調査を大連で実施。参加学生39名。

8．29　第5回中国現地プログラム参加のため、205名の学生が名古屋空港を出発。1年次秋セメスターでの実施は今回が最後となった（12月24日帰国）。

10．　現代中国学部開設5周年記念行事「21世紀の東アジア交流」として、シンポジウムと東アジアフェスティバルを実施。12日のシンポジウムは「発展する中国経済と日本企業――東海地方と中国の経済連携をめざして」と題し日本企業の中国関連部門担当者5名と服部健治教授をパネラーに迎え、今井理之教授の司会により進行した。13日の「文学・映画・演劇」をテーマとするフェスティバルでは朱天文氏（台湾の映画監督侯孝賢作品の脚本家）と佐藤忠男氏（映画評論家）が講演、さらに織茂秀子さんの一人芝居「旅人打鈴（ナグネ・タリョン）」が上演された。ほかに中国武術の演技、二胡の演奏など。

中日新聞 *2001.9.29*



開設5周年の記念行事

愛知大学現代中国学部は、開設五周年を記念する行事を十月十二、十三の両日、愛知県三好町の校舎で開く。

十二日は、午後二時から、シンポジウム。中国と取引のある企業の実務担当者と同学部教授が「発展する中国経済と日本企業―東海地方と中国の経済連携をめざして」に討論する。入場無料。

十三日には「東アジアフェスティバル」が開かれ、台湾の女流作家朱天文氏、映画評論家佐藤忠男氏の講演がある。また、演劇、中国武術、胡弓演奏を披露。東アジア各国の展示・バザー、料理コーナーが設けられる。

来月12、13日　愛知大現代中国学部

3．　現代中国学部第2回卒業生168名（9月卒業分も含む。以下同じ）。内山俊彦教授、緒形康教授退職。

2002 年度［平成14］

4．　新しいカリキュラム（02カリ）がスタート。

4．　木島史雄助教授、松尾肇子助教授、吉川剛講師着任。

4．　TT（Temporaly Teacher）制度導入。2名の中国人教員を中国の協定大学から1年間の任期で招聘。主に1年生の発音の指導に当たることになった。

8．2～23　第4回中国現地研究調査を昆明で実施。参加学生41名。

10．　今泉潤太郎学部長の辞任にともない、古森利貞教授が学部長に就任（任期は03年3月まで）。

10．2　文部科学省「21世紀COEプログラム」に国際中国学研究センター（ICCS）が採択される。

10．28　南開大学学生合唱団60名が来学し、特別演奏会を開催。

12．1　現代中国学部4年生冨永清美さん、全日本中国語スピーチコンテスト（日中友好協会主催）で優勝。

3．14　第6回中国現地プログラム参加のため、190名の学生が名古屋空港を出発（7月7日帰国予定）。今回より2年次春セメスターでの実施となった。

3．　現代中国学部第3回卒業生209名。今泉潤太郎教授、王硯農教授、榧根勇教授退職。

2003 年度［平成15］

4．　古森学部長再任。砂山幸雄教授着任。

中日新聞 *2003.5.13*

新型肺炎で帰国
留学生授業再開
愛大、感染なく

新型肺炎（SARS）の広がりを受け、中国・同済大のプログラムを十月末まで大学内で継続する現代中国学部（愛知県三好町）で十二日、授業が再開された。韓国しん同済大留学生百九十人全員、天津の南開大学へ帰国。学部三年生百四十人全員、七月上旬までの予定だったが、新型肺炎の影響で四月二十五日、太学が南開大留学生の帰国を決定したため、自宅で約一週間待機し、体温をチェックするなど経過をみたところ、先週末までに全員の安全が確認された。

この日午後、学生全員が今後の日程などについて説明を受けた後、早速、授業が始まった。上月中旬までの九週間、同大に招いた南開大の中国人教員十人による授業が行われる。

健康チェック表を手に、久々の授業に臨んだ最終学年の三年生たちは「最後までやりたかったけど、今の状況、みると正解だったと思う」と、気分を新たにしていた。

授業再開に向けての説明を聞く学生たち＝12日午後1時5分、愛知県三好町の愛知大学名古屋校舎で

中国現地プログラムを受講するため二月中旬から天津の南開大学へ留学。七月上旬までの予定だったが、新型肺炎の影響で四月二十五日、太学が南開大留学生の帰国を決定したため、自宅で約一週間待機し、体温をチェックするなど経過をみたところ、先週末までに全員の安全が確認された。

この日午後、学生全員が今後の日程などについて説明を受けた後、早速、授業が始まった。上月中旬までの九週間、同大に招いた南開大の中国人教員十人による授業が行われる。

健康チェック表を手に、久々の授業に臨んだ最終学年の三年生たちは「最後までやりたかったけど、今の状況、みると正解だったと思う」と、気分を新たにしていた。

5．12　感染被害がないことを確認して、名古屋校舎で現地プログラムを再開。

7．12　現地プログラム修了式を挙行。

9．18　現代中国学部の「中国現地重視の学部教育」が文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム」（COL、のちに「特色 GP」と略称）に選定される。東海地方ではほかに 5 大学 1 短大。

10.　愛知大学現代中国学部編『ハンドブック現代中国』が出版される（発行：あるむ）。執筆者は現代中国学部教員を中心に23名。

10. 31〜11. 2　ICCS 最初の国際シンポジウム「激動する世界と中国」を名古屋国際センターで開催。

11. 16〜11. 30　第 5 回中国現地研究調査を廈門（アモイ）で実施（SARS 発生の影響でこの時期に期間を短縮して実施）。参加学生30名。

11. 23　現代中国学部 3 年生寺西貴子さん、全日本中国語スピーチコンテストで 2 位入賞。

3．　現代中国学部第 4 回卒業生205名。嶋倉民生教授、郭翔教授退職。山本雅子助教授国際コミュニケーション学部に移動。

2004 年度［平成16］

4．　顧明耀教授、古澤賢治教授、梅田康子講師、賈蕙萱客員教授着任。

7．　賈蕙萱客員教授退職。

7．29〜 8．19　第 6 回中国現地研究調査をハルビンで実施。参加学生37名。

8．27　第 7 回中国現地プログラム参加のため、186名の学生が名古屋空港を出発。昨年度の SARS 問題の影響で実施を秋セメスターに後ろ倒しして実施した（12月21日帰国）。

3．11　第 8 回中国現地プログラム参加のため、163名の学生が中部国際空港を出発（ 7 月 5 日帰国）。

3．　現代中国学部第 5 回卒業生212名。古森利貞教授退職。

中日新聞 *2005.6.11*

どうなる日中関係
愛大でシンポ　現状と今後探る
名古屋

日中関係について意見を交わしたシンポジウム＝名古屋市瑞穂区

日中関係についてのシンポジウム「いま、日中関係を考える」が十日、名古屋市瑞穂区の愛知大車道校舎であり、小泉・靖国問題などを発端とした関係悪化の現状と今後を考えた。

純一郎首相の靖国神社参拝問題などで悪化した日中関係をどう改善するかなどの課題について、中国の専門家らが意見を交わした。

シンポは、同大現代中国学会が主催。パネリストは、清水美和東京新聞編集委員、趙宏偉法政大学教授のほか現代中国学部の馮昭奎客員教授、服部健治教授、砂山幸雄教授、同学部の梅田康子講師、同大国際コミュニケーション学部の山本雅子教授、司会は同学部の砂山教授。

顧教授は、「守り切った方、その理由を『中国の政策目標は、日本がかつての軍国主義に戻ろうとしているのではないか』と、関係悪化の背景について解説した。

清水編集委員は相次ぐ反日デモに触れ、「最近は反日デモも起こっていない」と説明。「デモの後、胡錦濤政権は対日友好を前面に押し出したが、現在は中国社会内の矛盾が噴出している」と、関係悪化の背景について解説した。

（小野谷　公宏）

2005 年度［平成17］

4．　今井理之教授、学部長に就任。馮昭奎客員教授着任。

4．　北京、上海等で反日デモが起こる。

5．16　中国の王毅駐日大使、愛知大学を訪問。

5．31　加々美光行教授、第58回中日文化賞を受賞。

6．10　現代中国学会、緊急シンポジウム「いま、日中関係を考える――対立を乗り越えるために」を車道コンベンションホールで開催。パネリストは、清水美和東京新聞編集委員、趙宏偉法政大学教授のほか現代中国学部の馮昭奎客員教授、服部健治教授、砂山幸雄

教授（司会）。

7．30〜 8．13　現代中国学部「第 1 回中国現地インターンシップ」を北京で実施。参加学生11名、受入企業 6 社。

7．31〜 8．21　第 7 回中国現地研究調査を武漢で実施。参加学生41名。

2．25〜 3．11　第 2 回中国現地インターンシップを実施。参加学生13名、受入企業 7 社。

2．24　中国の王毅駐日大使、車道校舎で「アジアの中における日中関係が果たす役割」と題して講演。「21世紀の新しいアジア主義」を提唱した。

2．24　愛知大学、中国政府と孔子学院設立に関する協定を締結、立命館大学などに続き日本で 4 番目の孔子学院設立校となった。

3．10　第 9 回中国現地プログラム参加のため、179名の学生が中部国際空港を出発（ 7 月 4 日帰国）。

3．18　現代中国学部主催シンポジウム「日台相互イメージの錯綜――「かわいい系」・映画・コマーシャル」を車道コンベンションホールで開催。台湾の漫画家・エッセイスト哈日杏子氏、明治学院大学教授四方田犬彦氏らが参加。

3．　現代中国学部2003年卒業生山田耕平さんが、JICA の青年海外協力隊員として派遣されたマラウイで、HIV（エイズ）予防啓発のために作詞し、自ら歌った歌「ディマクコンダ（チェワ語で愛しているの意味）」が、同国のヒットチャート 1 位に輝く。「マラウイで最も有名な日本人」としてテレビにも出演（『毎日新聞』3 月 8 日夕刊、ほか TV でも報道、紹介）。Newsweek 誌日本版06年10月18日号では「世界が尊敬する日本人100人」の一人に取り上げられた。

Newsweek 誌
日本版
2006.10.18

3．　現代中国学部第 6 回卒業生188名。中川祐三助教授、松尾肇子助教授退職。

2006 年度［平成18］

4．　06カリキュラムがスタート。

4．　孔子学院開校。講座数、受講者数ともに日本最大の孔子学院となる。

4．　『ハンドブック現代中国』第 2 版が出版される。

7．30〜 8．20　第 8 回中国現地研究実習を中国教育国際交流協会と西北大学の協力のもと、西安で実施。参加学生45名。

9．2 〜16　第 3 回中国現地インターンシップ実施。参加学生13名、受入企業 6 社。

11．25　第20回全日本学生中国語弁論大会（京都外国語大学・上海教育国際交流協会共催）で 2 年生の伊藤えりさんが優勝。

1．14　第24回全日本中国語スピーチコンテスト一般部門（中国滞在 3 カ月以上）で 4 年生の伊藤佳寿子さんが優勝。

2．3　現代中国学部10周年記念講演会開催。加々美光行教授、服部健治教授の講演のほか、加藤千洋氏（朝日新聞論説委員）が「21世紀の日中関係――若者に期待すること」と題して講演した。

2．3　愛知大学現代中国学部同窓会発足式。

3．9　第10回中国現地プログラム参加のため、189名の学生が中部国際空港を出発（ 7 月 3 日帰国）。

3．　現代中国学部第７回卒業生218名。

*2007*年度［平成19］

4．　馬場毅教授、学部長に就任。薛鳴教授着任。

7．　現代中国学部初めてのAO入試を実施。

8．1～21　第９回中国現地研究実習を山東大学の協力のもと済南で実施。参加学生35名。

8．2　平成19年度文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）」に採択される（応募総数600件のうち、選定されたのは119件）。

9．1～15　第４回中国現地インターンシップ実施。参加学生17名、受入企業９社。

11.24　第21回全日本学生中国語弁論大会で２年生の盛田美帆さんが２位入賞。

3．7　第11回中国現地プログラム参加のため、175名の学生が中部国際空港を出発（７月１日帰国予定）。

3．　『ハンドブック現代中国』第３版の刊行にむけた編集作業を終える（08年４月刊行）。

『ハンドブック現代中国』第三版

3．　現代中国学部第８回卒業生196名。服部健治教授、馮昭奎客員教授退職。

（作成：砂山幸雄）

【主な参考資料】
愛知大学五十年史編纂委員会編『愛知大学五十年史』通史編・資料編、2000年
『愛知大学新聞』
『ニューススポット愛知大学』各年版
『中国21』各号